

今週のメニュー

[トピックス](#)

“エコプロダクツ2010”に出展。見直されてきた塩ビをアピール！

- V E C 展示コンセプト：塩ビの新たな可能性を求めて -

[随想](#)

古代ヤマトの遠景（52） - 【中国・朝鮮半島情勢（6）】 -

信越化学工業（株） 木下 清隆

[編集後記](#)

トピックス

“エコプロダクツ2010”に出展。見直されてきた塩ビをアピール！

- V E C 展示コンセプト：塩ビの新たな可能性を求めて -

昨年12月9日から11日までの3日間、日本最大級の環境展示会「エコプロダクツ2010」((社)産業環境管理協会、日本経済新聞社主催) が、東京ビッグサイト東ホールで開催されました。今年の出展者数は750社・団体、入場者数は昨年とほぼ同数の18.3万人となりました。今回のテーマは「G (グリーン) X C (クリーン) 革命！いのちをつなぐ力を世界へ」で、塩ビ工業・環境協会 / 塩化ビニル環境対策協議会も「塩ビの新たな可能性を求めて」『New PVC in Tradition』環境の時代に相応しい塩ビ、社会を支える塩ビ、新たな可能性を求めて！と題して塩ビの新しい可能性とリサイクル性等をアピールすべく出展しました(写真1)。

今年は、展示ブースを、空気入りビニルバルーン、パイプ、床材、サイディング、樹脂サッシ、硬質塩ビ板を使用した展示台、パネルなど、全て塩ビで製作しました。展示ゾーンは、新しいデザイン・機能を持った塩ビ製品やリサイクル性をアピールすべく当協会が支援したりリサイクル製品などを、「見直されてきた塩ビ」、「塩ビの新しい可能性」、「地球環境に貢献する塩ビ」と大きく3つのゾーンに分けて展示しました。

ブース入口には「塩ビって？」とプリントした大きなバルーンを設置し、その中に、食品サンプル、点滴袋 & チューブ、サイフ / 定期入れなどの塩ビ製品をそれぞれ小さなバルーンに入れることによって、既に世の中で有効に使われている塩ビ製品をアピールしました(写真2)。

「見直されてきた塩ビ」ゾーンにおいては、ウィッグ、レインブーツ、リサイクルカードなどを展示、見直された塩ビ製品を認識頂きました(写真3)。

「塩ビの新しい可能性」については、塩ビ管スピーカー、折り畳める花瓶、手作り塩ビ尺八・フルート、塩ビ強化和紙の行灯、光る壁紙、ファッションバッグ等を展示す



1. V E C ブース
(クリックで拡大)



2. バルーン展示「塩ビって？」
(クリックで拡大)

ることによりアピールしました。特に新鋭デザイナーによる、透明塩ビシートを加工したファッションバッグが多くの皆さんの目を引き付けていました(写真4)。

「地球環境に貢献する塩ビ」ゾーンでは、壁紙をリサイクルした車マット、電線被覆材リサイクル品の導電性床材、パイプのリサイクル発泡三層管などのリサイクル製品を展示、塩ビのリサイクル性の良さをアピールしました。

この地球環境への貢献展示ゾーンの上には、「フラクタル日除け」を全面に設置して、どこからでも眺められるように工夫しました。屋内だったので、その“日陰効果”が体験できませんでしたが、「フラクタル日除け」の構造とその効果についての説明を聞かれた方は納得されていました(写真5)。

また、ご来場者へは簡単な塩ビに関するクイズラリーを実施しました。正解者全員にノベルティとして塩ビ壁紙をリサイクルし、バイオマスマークを取得した「eco コースター」を差し上げました。ご来場の子供達だけでなく大人の方にも喜んで頂き、改めて塩ビ製品のリサイクル性を訴える事が出来ました。

展示会の立会いには、塩化ビニル環境対策協議会、塩ビ工業・環境協会の会員会社・団体から、累計17名の方と、スタッフ9名が参加し、展示品の説明やご質問の受付、クイズ用紙の配布など、昨年とほぼ同等の6千人近い来訪の方々に対応しました。

特に木曜・金曜日の午前中は小中学生の課外授業の一環として大勢の子供達で賑やかでした。中には昨年も当ブースを訪れた子供もおり、こんなクイズは簡単だといって友達に教えたりしていました。将来の塩ビ理解者が増えてきている事を感じました。午後はビジネスマンの方々が多くなり、塩ビって色々な用途・製品に使用されているんですねなどと“見直されてきた塩ビ”への理解を頂きました。

また、最終日土曜日には、家族連れで多くの方が来場され、家族でクイズラリーに参加して頂き、ノベルティや展示ブースで使用したバルーンに大喜びでした(写真6)。

昨年と比べますと塩ビに対する誤解・わだかまりを持った方の来場は少なかったように思えました。ブースを訪れた多くの方々が塩ビ製品の新しい可能性とともに、環境への熱心な取り組み・地球環境への貢献を理解して頂けたと思っています。

企業関係の方からは、塩ビほど優れた樹脂はない、厳しい経済環境の中で、コストパフォーマンスに優れる塩ビ製品をもっと使いたいのと頑張ってほしいとの激励も頂きました。(塩ビ製品の出展にご協力頂いた方々、立ち会って頂いた方々に御礼申し上げます。){了}



3. 展示「見直されてきた塩ビ」
(クリックで拡大)



4. 展示「ファッションバッグ」



5. 展示「フラクタル日除け」



6. 小中学生で賑わうブース

古代ヤマトの遠景（52） - 【中国・朝鮮半島情勢（6）】 -

信越化学工業（株） 木下 清隆

<新羅・伽耶>

朝鮮半島は、北方の高句麗が古朝鮮の跡を継いで独立し、中国との戦いに明け暮れるが、それが一段落すると、彼らは目を転じて半島全体の制圧を目指すようになる。このような高句麗の方向転換に必然的に百済が国家として統一され、高句麗との死闘を繰り返すことになる。この間、半島の東南部に位置する辰韓、その後の新羅は、ある程度埒外に置かれていたため、百済には遅れるが建国に邁進出来る余裕があったといえる。



4～5世紀頃の半島南部

彼らの歴史は、『三国志記』の「新羅本紀」によれば、その始祖は大きな卵から生まれた赫居世かくきよせいとされており、王として即位したのが、前57年のことになっている。辰韓には当然昔からの土着の民が居住していたはずであるが、この地方には色んな人々が移住して来たようで、『三国志魏書』などに土地の古老の話として「自分達は、かつて秦の労役に耐えられずに逃げて来た古人の孫だ」といった伝承が記載されている。更に古朝鮮が前漢の武帝によって滅ぼされたとき、多くの遺民がこの地に移ってきた。彼らは現在の慶尚北道の慶州一帯に住み着いたとみられ、既に鉄製品に関する技術を保有していたことから、土着民達の中で次第にリーダー的な立場に立つようになる。

この当時、慶州近郊には幾つかのグループが存在していたようであるが、これらのグループの長たちが、新しい移住者である赫居世を自分たちのリーダーだと認めたことになる。当然、卵から産まれたなどという話は後からの創作である。この赫居世の姓は「朴」氏とされているが、この外に「昔せき」氏、「金」氏が、王位継承者と認められており、彼らの祖の誕生譚も新羅本紀に残されている。このことはグループ群の中で、特定の三グループから王が選出されていたことを示している。

このように新羅建国の核となったのは、慶州付近に定着した古朝鮮の遺民達だったようだ。この慶州一帯の勢力が大きくなる前後の頃、辰韓には既に六国が存在していたらしい。その後、十二国に増えたと記録されている。その十二国の中に慶州一帯の勢力として斯蘆国しろうの名が記載されていることから、先のグループ群はその後、斯蘆と呼ばれるようになっていたことが分かる。この斯蘆国が辰韓内の旧勢力を徐々に制圧して行くことになるが、その時期は、2～3世紀頃と長期に亘っており、斯蘆国が最終的に辰韓を統一したのは、四世紀中葉と想定されている。

斯蘆国が旧勢力を制圧して新羅を形成してゆく過程で、注目すべき問題がある。それは弁韓問題である。弁韓問題とはその昔、韓と呼ばれていた地方のうち、弁韓だけが国家として統一されなかったという問題である。馬韓からは百済が生まれ、辰韓からは新羅が生

まれた。しかし、弁韓からは統一国家が生まれなかった。何故かという問題である。弁韓地方はその後、任那或いは伽耶と呼ばれるようになるが、ここでは、主として伽耶を用い、必要に応じて任那或いは弁韓の語を用いることにする。

この伽耶は半島の南端にありその北東部は新羅と接している。しかも新羅の王都慶州から、伽耶の国境まで僅かに60kmしか離れていない。彼らの国家統一の過程では、これより遥かに遠方の北部或いは西部の地域まで幾度も遠征しており、彼らがそれより近い伽耶地方の諸国に食指を伸ばさなかったのは不思議である。何故、新羅はその建国の過程で弁韓を併合しなかったのか。これは一つの謎となってくる。この謎を解く鍵は少なくとも二つある。一つは伽耶地方が新興新羅の侵入を許さないだけの力があつた。他は倭国が何らかの形でこの問題に関与し、倭国の力が新羅の侵攻を防いだ、との考え方である。

この時代、伽耶地方には6ヶ国の有力国があつたとされ、6伽耶と呼ばれていた。この中で最も栄えていたのが「金官伽耶」である。洛東江河口の西岸に位置するこの国は『魏志』倭人伝に出てくる「狗邪韓国」とされている。なお、この河口の東岸には現代でこそ良く知られている釜山が位置している。この金官伽耶国を豊かにした大きな要因は鉄の生産である。

金官一帯で生産された鉄は、帯方郡を始め近隣諸国に引取られた。帯方郡以外は対価を支払ったはずである。当然、倭国もその一員である。倭国が自前で砂鉄あるいは鉄鉱石から鉄を生産し、それで国内需要を賄うようになるのは、6世紀以降である。これに対し倭国が鉄を利用し始めるのは、銅と同じ頃の弥生時代とされている。したがってその間、数百年間、倭国は鉄素材を輸入し、鋤・鋤・鍬・刀等の鉄製品の製作に専念していたことになる。その素材の最大の供給国が金官伽耶だった。現代における石油以上の国家の戦略物質だった鉄の入手に、倭国内の諸国は懸命の努力をしたに違いない。

しかし、倭国におけるこの鉄の買付けは1～2世紀の頃になると、北部九州の国がその業務を集約するようになる。具体的には現在の福岡県に位置する伊都国と奴国である。彼らはその後「イト連合国」を形成していたと想定されており、金官で生産される鉄の輸入総代理店のような機能を果たしていたらしい。彼らを通してしか鉄が入手できなくなれば、倭国内での彼らの地位は高まり、その力は当然大きくなって行く。したがって、この鉄の配分権に基づく一つの体制というものが想定されることになるが、この体制は2世紀後葉に起きた「倭国大乱」によって崩壊したと考えられている。

この後、現在の奈良県・滋賀県以西の国々がまとまって「新生倭国連合」を誕生させる。要するに現在の西日本を中心とした連合体である。このとき、その王として担ぎ出されたのが卑弥呼であった、ということである。

卑弥呼時代になっても、鉄の輸入とその配分は最重要課題だったと考えられるが、このうち輸入業務は、倭国連合のメンバーとなった伊都国或いは奴国が、手馴れた業務として引き継いだものと想定される。配分は諸国の要望をまとめながら、倭国連合内で不満が出ないように配慮して行われたはずである。このように鉄の配分問題は解決したと考えられるが、倭国における金官伽耶の重要性は益々高くなって行く。

このような理由で金官伽耶は6伽耶の中でもっとも豊かな強国となった。それまで伽耶諸国は早くから領土問題でそれぞれ新羅と小競り合い程度は繰り返していたが、常に敗れていたらしい。このような事情から伽耶諸国は新羅が統一されるにつれ、これに対抗するための連盟を作る。おそらく金官伽耶が盟主的な立場に立っていたと考えられる。しかし、この連盟は統一国家形成にまでは発展しなかった。このことは、6伽耶の思惑がいろいろと絡んでいたからで、紐帯はそんなに強いものではなかったことを示している。

したがって隆盛の新羅に対抗するのに他の諸国があまり当てにならないとすれば、金官伽耶が自ら矢面に立たざるを得ないことになる。では、彼らの国力、兵力で新羅に対抗できたかであるが、それは無理だったといえよう。国家統一に200年間近くも戦い続けた新羅である。国力・兵力共に充実していたはずである。これに対し、金官伽耶は、新羅と国境紛争程度は幾度か経験しているが、国の存亡をかけた戦いの経験はない。

では、金官国はどうしたのか。それは倭国の力に頼ることだったと考えられる。具体的には倭国に支援軍の派遣を要請したということである。その時期は、新羅の統一が成る頃の4世紀中葉だったと想定される。当時、金官伽耶は新羅の脅威を強く感じるようになっていた可能性が高いからである。

この時期の派兵問題は、日本書紀の神功皇后紀四十九年条(369年)に僅かに触れているが、荒唐無稽として、ほとんど問題にされていない。しかし、この時の半島派兵を仮説として導入すると、この後の倭国内及び半島情勢の解釈が極めてスムーズになることから、ここでは「4世紀中葉に金官伽耶の要請に基づき倭国は、金官伽耶へ派兵した」との仮説を導入することにする。倭国における派兵の大義名分は金官伽耶における鉄資源の確保である。もし、この地域が新羅の手に落ちた場合、これまで通りの鉄の入手が、可能かどうか確証が無くなるだけでなく、強烈な外交カードとして用いられた場合、倭国としては手の打ちようが無かったからである。

倭国は出兵し、新羅と戦った。勝敗は定かではないが新羅が倭国を恐れるようになったのは、確かといえよう。この4世紀中葉の戦い以降、新羅が伽耶地方に本格的に侵攻してくるのは6世紀になってからで、その間、ほとんど手出しをしていないからである。新羅との戦い以降、倭国の兵は恐らく金官伽耶の要請で伽耶地方に駐留し続けたと想定される。そのプレゼンスが新羅の足を止めたといえよう。

更に、伽耶地方の諸国も、倭国の力を頼りとするようになり、相次いで倭国兵の駐屯地に朝貢して来るようになったと考えられる。このように伽耶地方は倭国のプレゼンスによって、新羅の侵攻を食止め、その地方に安定をもたらしたといえよう。このような状況が生まれたことで、伽耶地方に統一国家が誕生することはなかったと説明することは出来る。

なお、その倭国兵の駐留場所であるが、恐らく金官伽耶内の適当な場所が提供されたと考えられるが、その場所が「任那」と呼ばれていたのではないかと想定される。任那は当初は狭い地域を指していたが、倭国のプレゼンスが高まるに従い、より広い地域を示す語として用いられるようになったと考えられる。

(つづく)

前回：[「古代ヤマトの遠景」\(51\)](#) - [【中国・朝鮮半島情勢\(5\)】](#) -
「古代ヤマトの遠景」：[バックナンバー](#)

編集後記

小さな子どもの言動に感心する話がありました。今住んでいる社宅の子どもたちが日頃から元気に挨拶をすることです。それも、やっと言葉を覚えての小さな子どもが身の丈の何倍もある大きな大人にぺこっと頭を下げて挨拶をするのです。また、先日、向かいの友達を誘いに来た小学校低学年の女の子が一輪車に乗ったままベルを押そうとして滑ってしまい、大きな音を立ててしまった時のことです。家内がたまたま買い物から戻って来たときに出くわしたのですが、その子は直ぐに事情を説明して、大きな音を立てて驚かせたことを何度も謝っていたそうです。家内は子どもが怪我をしていないかと心配して声を掛けたのですが、幸い怪我もせずホッとしたそうです。小学校での出前授業でも感心する子どもたちがたくさん居ます。その子どもたちに明るい社会を残したいですね。

(円行)

関連リンク

[メールマガジンバックナンバー](#)

[メールマガジン登録](#)

[メールマガジン解除](#)



編集責任者 事務局長 東 幸次

東京都中央区新川 1-4-1

TEL 03-3297-5601

FAX 03-3297-5783

URL <http://www.vec.gr.jp>

E-MAIL info@vec.gr.jp
